

特集に当って

東京工業大学 森 雅夫

編集長より、ORの新7つ道具というようなことで、手法に関して特集をまとめられないかというご下問があった。それはORの名人上手のすることで、私なぞとてもと辞退申し上げた。それならば、お前は経営工学科にいるのだから、日本経営工学会、日本品質管理学会の方々もよく知っているはずであろう。ついては、3学会の協力のスタートにふさわしく、多くの人が共通して関心のもてる手法について考えてみよとのご下命であった。このような正当なる良き案に正面からとりくむのであれば他に適任の方も多はずである。しかし、再びのご下命に引込みもならず、日頃ぜひ書いてほしいと思う方々を思い浮かべながらOR関連分野の vivid な諸手法を紹介する案を提案させていただいた。さらに、編集委員会のお知恵を拝借し、“ORとその周辺的手法”と題してとりまとめさせていただいた。

高原康彦氏の「問題解決へのソフト・システム・アプローチ」は、これまでのORの手法がいかにかハードなものであったかを改めて認識させてくれる。ORでは、程度の差はあれ、まず目的を明確にし、それに沿って評価もなしえた。しかし、人間のからむ度合いが濃くなるにつれて、目的は漠として形を定めえぬが、人々は“問題”を認知する。そのような問題の対処に、システム理論を採用した方法論を提示する。

松崎功保氏の「意思決定支援システムのための構造分析手法の適用」はパソコンの普及とともに急速に発展しつつあるDSSの現況と、構造の見

えにくい問題にいかにか構造を見だし視覚化するかを、実践例をあげながら解説する。なお、ここで紹介された手法の研究用のソフトに関心のある方は学会にお問い合わせください。

圓川隆夫氏の「多段階の物流と不確実性」は、多段階在庫の入り組んだ状況を、“状態”としてエシュロン・ストックを考えることにより、いかにか明確に把握できるかを示す。物流とは逆向きの、消費者から生産者へ向かう情報の流れに載せられた不確実性を、エシュロン・ストックの概念により吸収するすべを明解にする。

田辺國士氏の「ベイズモデルとABIC」は、パラメトリックなモデル特定化を極力さけて、対象の構造に柔軟に追従できる可塑的かつ重層的なモデル族を設定する新しいデータ解析法を解説する。データの平滑化の例に、その切れ味のほどがうかがえる。

宮川雅巳氏の「フィールド・ライフ・データの解析手法」は打ち切りのある寿命データをとり扱うノンパラメトリックな諸手法の統一的な解釈を試みている。個々のデータはそれぞれ1個分のデータの重みをもつが、打ち切りデータの重みが寿命の確定したデータにどのように割り振られるべきかを問うことにより、寿命分布を推定するメカニズムを解き明かす。

林恒一郎氏の「交通需要予測における非集計モデルによるアプローチ」は、交通機関の選択過程の分析にロジット・モデルが活用されていることの現状を報告し、特に開発途上国での交通問題の解明にも有効な手法となり得ることを示唆している。

この他、OR本流の記事として、刀根先生の「LPに新しい解法あらわれる」を予定していたが、秋季発表会での講演の好評により“講座”として連載されることになったのは慶ばしいことである。